

## 絵本を読むという行為の記述の試み（その2） ——『あめふり』と『ゆかいな かえる』を例として——

高原 佳江

### はじめに

絵本をテーマにした文化施設や子ども図書館、子どもの本専門店では、動植物、天気などの自然を描いた絵本が多かれ少なかれ用意され、これらの絵本を大人が子どもに読んだり、子ども同士が読み合ったりする様子が見られる。人が自然と関わる機会のひとつとなっていることがうかがえる。

絵本を対象とする研究は多数あり、自然を描いた絵本に関する研究も行われている。児童文学研究者で翻訳家でもある脇明子は、編著書『子どもの育ちを支える絵本』<sup>1</sup>において、子どもの育ちに本来必要なのは人間関係や自然体験であり、絵本は人間関係のほか、自然体験の不足を補う上で大きな役割を果たすと指摘する。元幼稚園園長の梶谷恵子、発達心理学者の湯澤美紀、保育士の片平朋世とともに、幼稚園や保育所での子どもの生活や読み聞かせの事例を交えつつ、自然を描いた絵本を取り上げ、子どもの自然体験の不足を補う絵本を論じる。

幼児教育学者の瀧川光治は、著書『日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究』<sup>2</sup>において、日本における幼児期の科学教育、および科学絵本の歴史的分析を通して、幼児期の科学教育のあり方を示す。科学絵本については、自然（動植物や自然界）や自然現象などを描いた絵本の中で、物語性を持つもの、かつ事実や事象を見出すための着眼点を持つものと定義し、その歴史を明らかにして、幼児期の科学教育の社会文化的な意義を明らかにする。子どもの育ちを支えるという視点から自然を描いた絵本について論じる脇の論考、および科学絵本の歴史を明らかにする瀧川の研究は重要なものである。

これらの先行研究に対して、筆者が注目したいのは、前回の論文「絵本を読むという行為の記述の試み——『おおきなかぶ』と『サルビルサ』を例として——」<sup>3</sup>に引き続き、日常の中で人と人が行う絵本を読むという行為である。自然を描いた絵本を読む場合も、絵本を読むという行為は、声や姿や動き、相手との距離や人間関係のあり方、時間、場所、その場の状況などの複雑な要素が同時に働くことによって実現すると考えられる。

本稿では、前述の論文と同様に、背景要素を意識して、実際に起こっている絵本を

読むという行為をできるだけそのものに近い形で記述し、記述したものを考察することによって絵本が内包する力の一端を明らかにしたいと考える。以下、まず、「1. 研究方法」において研究方法を説明する。前述の論文と重複する箇所もあるが、とりわけ「(2) 記述方法」において加筆、修正、削除を行ったことから、研究方法の説明からはじめたい。

## 1. 研究方法

### (1) 研究方法と対象

筆者は、絵本が実際に読まれている現場にいて、そこで起こっている出来事をとらえることに価値があると考え、フィールドワーク<sup>4</sup>を行っている。具体的には、できるだけその場を壊さないようにするため、児童学者の本田和子が表現するところの「観る」<sup>5</sup>を参考にして、保育学における観察に近い立ち位置をとっている。大人があらかじめ開催時間を決め、環境を演出し、絵本を用意して子どもに読み聞かせる催しも観るが、日常の中で人々が行う絵本を読むという行為（以下、絵本読み）を重点的に観ている。観察終了後、自身の目で見て、耳で聞いて、肌で感じた体験と記憶を整理し書き記しながら、考察するという手順を踏んでいる。

主としてフィールドワークを実施しているのは、「三鷹市星と森と絵本の家」（以下、「絵本の家」）である<sup>6</sup>。「絵本の家」は、大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台（以下、天文台）の協力のもとに、東京都三鷹市が設置、運営する文化施設である。「絵本の家」は、天文台の森の中にある1915（大正4）年に建てられた日本家屋を保存活用し、隣にある庭も使って、絵本の展示や絵本を楽しむ場の提供と、自然や科学への関心に繋がる活動を行っている。絵本との出会いやさまざまな体験を通して、子どもの知的好奇心や感受性を育み、人々が宇宙や自然、芸術文化に親しむ場となり、子どもが豊かに成長する地域文化の創造に寄与することを目的としている<sup>7</sup>。主に「絵本の家」でフィールドワークを実施している理由は、2009（平成21）年7月7日に開館して以来、基本方針が明確であり、2018（平成30）年1月20日に30万人目の来館者を迎え、同年7月7日に開館10周年を迎えるなどうまく機能し続けているといえるためである。

本稿では、これまで「絵本の家」で集めた事例の中から、本研究の目的に沿った事例を2つ取り上げる。これら2つの事例を記述した後、記述したものを手掛かりに絵本読みについて考察する。

## (2) 記述方法

本稿では、絵本読みの記述が重要な役割を担っている。現場での出来事をできるだけそのものに近い形で記述するため、文化人類学者である西江雅之の「口承伝承の記述」<sup>8</sup>を主に参考にする。本稿では、絵本読みは、種類の異なった10の要素が複合することによって成り立っているものとする。

- ① 言葉 (a. 言語的側面、b. 非言語的側面、c. 前後関係)
- ② 絵
- ③ 伴奏的付加物
- ④ 身体の動き
- ⑤ 人物の特徴
- ⑥ 空間と時間 (a. 空間、b. 時間)
- ⑦ 環境
- ⑧ 社会的背景
- ⑨ 生理的反応
- ⑩ 予期せぬ効果

このうち「② 絵」は、西江が提案した要素にはなく、追加したものである。絵の要素については、児童文学研究者である藤本朝巳の絵本の絵についての諸論考<sup>9</sup>を参考にする。

絵本読みを記述するために各要素を部分的に構成し直していることから、10の要素について簡単に説明を加える。

### ① 言葉

言葉は、言語的側面、非言語的側面、前後関係から成る。

- a. 言語的側面…絵本作品の中に見出せる部品としての語、句、文である。文体、字体、文字着色、表記も含む。事例で読まれたのが翻訳された絵本の場合、実際に読まれたものを重視するため、原書ではなく翻訳の語、句、文に注目する。
- b. 非言語的側面…絵本作品の中の言語に付随して現れる読み手の個人的な声、年齢や性別としての声、声の大小、強弱、高低、速さのあり方などである。
- c. 前後関係…読み手と受け手がその絵本作品を読んだことがあるかどうか、読んだことがあるならどの程度知っているかということである。

### ② 絵

主に、絵本作品の内側、すなわち絵の構図、色の使い方、明暗、陰影、点、線などである。このほか、絵本作品の外側、すなわちカバー、前折り返し・後折り返し、帯、表紙・裏表紙・背表紙、前見返し・後見返し、綴じ、版型など、および、絵本作

品の内側と外側の間にある部分、すなわち前扉・前扉裏、本扉・本扉裏、奥付なども重要な意味を持つので、必要に応じて言及する。

### ③ 伴奏的付加物

絵本読みにおいて伴奏となるものは、受け手を中心とする、周囲の人々の斉唱、合唱、叫び、手拍子などである。

### ④ 身体の動き

絵本作品に付随して現れる身体の動きである。これらの動きは、読み手、受け手、あるいは両者に生じる場合がある。また、読み手と受け手の基本姿勢が座位か立位かも考慮する。絵本読みに伴うページめくりにも言及する。

### ⑤ 人物の特徴

受け手の前で明確にさせている、読み手の外観的特徴と内面的特徴である。第1に、読み手の年齢や性別が見せているものである。第2に、顔の形や体形が見せているものである。また、行う絵本読みに込められる読み手の性質を指す。該当する場合、身体付加物にも言及する。

### ⑥ 空間と時間

- a. 空間…絵本が読まれるときに必要な空間で、地理的性質に規制されているものである。選択される場合とそうでない場合がある。また、読み手と受け手の人物配置、すなわち読み手と受け手の距離、受け手同士の距離、それぞれが保っている方角という点からも注目する。
- b. 時間…絵本読みの時間には、開催時間と所要実時間、すなわちいつ頃に行われたかと、どの程度の時間をかけて行われたかという2種類がある。

### ⑦ 環境

環境は、与えられた環境と、演出された環境とに大別される。日常の中で行われる絵本読みは、特別に用意され明確に演出された環境で行われることは少なく、一定の広がりさえ得られればそれで足りるという考えのもとに、与えられた環境で行われることが多いと推測される。

### ⑧ 社会的背景

読み手と受け手の人間関係の背景で、親子の関係、祖父母・孫の関係、兄弟姉妹の関係などに見られるものである。あるいは、面識があるかどうかを考慮する。

### ⑨ 生理的反応

読み手が実際に絵本を読んでいるときに見せる個人的な感情表現が、その中心的なものである。絵本作品の内容と直接関係を持つものではなくても、読み手の中から沸き上がる苛立ち、退屈、悦びなどの表現となってそこに現れるものである。このような感情は顔の表情のみではなく、動作でも表現されることがある。絵本読みにおける

このようなものの効果は、主に絵本読みの中断や一層の熱演ということになって現れる。また、読み手が受け手の表情や動作の変化を自身の絵本読みの効果として利用する場合がある。

#### ⑩ 予期せぬ効果

小動物や虫が入り込む、雨が降る、振り子時計が鳴る、通り掛かった人が読み手に声を掛けるなどが考えられる。このような外部からの妨害といえる要素も、行われている絵本読みに何らかの影響を与えるもののひとつとなっている。

本稿では、ここまで説明してきた言葉、絵、伴奏的付加物、身体の動き、人物の特徴、空間と時間、環境、社会的背景、生理的反応、予期せぬ効果という10の要素が複合することによって実現するものとして、絵本読みを記述していく。現場での出来事の置き換えとして記述されたものは、絵本読みという行為が持つ意味を知る上で有効な手掛かりを与えてくれると考えられる。

次に、「2. 事例の記述」において、2つの絵本読みの事例の概要を報告し、各事例を10の要素別に記述する。

## 2. 事例の記述

### (1) 事例1 『あめふり』を読む (2010年8月18日15時30分頃)

今にも雨が降り出しそうな中、3歳の男の子・Aくんが母親と来館する。Aくんが、「雨が降りそうだよ」といいながら、心配そうに廊下でガラス戸越しに空を見上げる。「雷が鳴るかも、家に帰ろうよ」といい、きたばかりであるにもかかわらず帰りがかる。母親は、「大丈夫よ」とAくんがいい、読書室に入って、絵本を選びはじめる。そして、「今日の天気にちょうどよさそうだから、これ読もうか」といって本棚から『あめふり』を取り出し、表紙をAくんに見せる。Aくんは「家に帰ろうよ」といい続けるが、母親は「これだけ読もう」とAくんを説得する。

Aくんと母親は読書室のソファに並んで座り、母親がAくんに大きな声で読みはじめる。Aくんは、それまでも落ち着かずそわそわしていたが、「かみなりもゴロゴロなりだし、いなびかりまでピカリピカリ。」という絵本の文章を母親が一際大きな声で読んだ途端、「雷が鳴りそうだよ！ 鳴るよ、家に帰ろうよ！」といて、今すぐ帰るように母親を促す。母親は無理やり最後まで絵本を読む。読み終わるとすぐに、Aくんは母親の手を引っ張って帰っていく。

事例1の絵本『あめふり——ばばばあちゃんのおはなし』（さとうわきこ作・絵）は、福音館書店から1984（昭和59）年に月刊誌『こどものとも』として出版され、1987（昭和62）年に「こどものとも傑作集」として出版された。事例1で実際に読まれたのは、2006（平成18）年5月10日第39刷のものであった。『あめふり』は、長雨にあきあきし、怒った「ばばばあちゃん」が雷をこらしめる物語である。

次に、要素別に記述する。

### ① 言葉

- a. 言語的側面…地の文、および「ばばばあちゃん」、子犬、子猫の会話文で構成される。第1場面で「じとじと」という擬態語、第3場面で「ゴロゴロ」という擬音語と「ピカリ ピカリ」という擬態語が使用される。第2場面では、「ばけつのみずをぶちまけたような」という比喩表現が用いられる。言葉遣いは簡潔で、文末は「だ・である」調である。文章は横書きで表記される。文字は平仮名と片仮名で表記され、黒色の明朝体で、第12場面を除いて同じ大きさに印刷される。
- b. 非言語的側面…母親は、張りのある、大きな声と明瞭な発音で『あめふり』を読んだ。第3場面の「かみなりもゴロゴロなりだし、いなびかりまでピカリピカリ。」は、とりわけ大きな声で読んだ。第3場面より後は、それまでよりも早口で読んだ。
- c. 前後関係…Aくんも母親も『あめふり』を読んだことがなかった。

### ② 絵

絵本原画の素材は、紙、インク、水彩である<sup>10</sup>。20×27センチメートルの横長の絵本で、全32ページである。

本扉では、「ばばばあちゃん」の家と庭、さらに周囲の森が描かれる。灰色の空が黒味がかかった紫色の雨雲に覆われ、右上から左下へ向けて黒色の細い直線を描くことによって雨が降っていることを表現する。俯瞰して描くことで、物語の舞台となる場所の状況説明がなされる。第1場面では、見開き全体に絵が描かれる。本扉と比べて家がクローズアップされ、家に集中するように黒色の細い直線を描くことによって降雨を表す。本扉と第1場面の雨は、浮世絵の雨<sup>11</sup>のように、細い直線で表現される。線状の雨は、空から降る雨の量、および雨粒の速度を表す。線の本数は少数であり、線の角度は垂直ではなく斜めで、線の起点から終点までの距離が短いため、この時点では雨脚はそれほど強くない。第2場面では、左ページを使って、水平の視点で、室内にいる「ばばばあちゃん」、子犬、子猫が窓から外を眺める様子が描かれる。窓ガラス越しに描かれる外は薄灰色で、雨は中央が太く両端が細い形の薄緑色の線を右上から左下へ向けて描くことによって表される。降雨が、雨天時特有の暗さや視界の遮り

とともに表現される。第3場面の右ページでは、白色の背景に、右上から左下へ向けて稲妻形のように交互に折れ曲がった黄色の線を描くことによって雷鳴を表現する。黄色の線に重なるように淡黄色、薄橙色、橙色を配置することで、閃光と音が迫力を伴って描かれる。さらに、黄色の補色である青紫色を配することによって、色相差の大きさを生かして黄色を目立たせて雷の威力を示すとともに、雷雨を表す。

背表紙には、ゴシック体の、黒色の文字で「あめふり」とある。「あめふり」の下には、それよりも小さな青緑色の文字で「ばばあちゃんのおはなし」、黒色の文字で「《こどものとも》傑作集」とある。背表紙、とくに「あめふり」という文字は、現実に今にも起こりそうな降雨が絵本の中で描かれていると母親に推測させ、母親が本棚に背表紙を見せて並ぶ多数の絵本の中から『あめふり』を選ぶきっかけとなる。

表紙では、画面の四方が緑色の枠で囲われている。枠には、降雨を表す、中央が大きく両端が細い形の白色の線が右上から左下へ向けて描かれている。枠内には、雨のため外で遊べず退屈している「ばばあちゃん」、子犬、子猫が描かれる。右上に「あめふり」という文字がゴシック体で、枠の緑色の補色である赤紫色で配置され、「あ」の筆順の最後の部分に雨粒が付いている。表紙は、すべての要素が相まって絵本の内容が想像できるようになっており、Aくんの家に帰りたいたいという気持ちを加速させることになる。

### ③ 伴奏的付加物

なし。

### ④ 身体の動き

Aくんの母親は、ソファに座って、自身とAくんの両者の膝の上にわたるように絵本を置き、『あめふり』を読みはじめた。自らが絵本を読むのに合わせて絵本のページをめくった。ページをめくらない左手を、Aくんの背中に添えていた。

Aくんは、ソファに座って、母親が『あめふり』を読むのを聞いた。座面が高いため床につかない足を前後に振ったり、母親の手を引っ張ったりして、全身で家に帰るように母親を促した。

### ⑤ 人物の特徴

Aくんの母親は20代後半の女性であった。顔の形や体形はふっくらとしていて、顔色は生き生きと健康的で、全身から生命力が溢れていた。

### ⑥ 空間と時間

- a. 空間…『あめふり』が読まれたのは、Aくんと母親が『あめふり』を読む前から経過していた読書室の東側であった。読書室の東側は7.45平方メートルの空間である<sup>12</sup>。東と西に本棚が置かれ、北に窓があり、南は中廊下に接している。窓に沿って大人向けの1人掛けソファが2つ間隔をあけずに置かれ、床には何も敷か

れていなかった。読書室と中廊下、中廊下と絵本展示室、絵本展示室と廊下、それぞれの境目の一部に壁はあるが、扉はない。廊下には網戸とガラス戸が取り付けられている。廊下から、また絵本を読んでもらうときにAくんが座っていたソファの位置から、網戸やガラス戸越しに外の様子が見られる。さらに、ソファの背後にある窓から外の明るさを感じることができる。読書室の東側の北の窓に沿って並ぶ2つのソファのうち東側のソファにAくん、西側のソファにAくんの母親が位置していた。

- b. 時間…お盆明けの、水曜日の夕方であった。『あめふり』の絵本読みは、あらかじめ開催時間を決めて行われたわけではなく、現実にも起こりそうな降雨が描かれていると推測される絵本を母親が見付けたのを契機にはじまった。Aくんの母親による絵本読みは、Aくんが家に帰るように急かしたため、催しなどで大人が子どもに読み聞かせるときよりも短い時間で行われた。

#### ⑦ 環境

与えられた環境であり、『あめふり』を読むために演出されることはなかった。読書室のある建物は、大正時代に建てられた伝統的な日本家屋である。この日本家屋は、天文台の森の中にある。

#### ⑧ 社会的背景

Aくんとその母親は親子の関係にある。

#### ⑨ 生理的反応

今にも雨が降り出し、雷が鳴り出しそうであったことから、Aくんの母親は、降雨が描かれていると推測される絵本を大なる好奇心を持ってAくんに読みはじめた。それは、大きな声と明瞭な発音で表現され、『あめふり』の熱演となって現れた。しかし、その熱演はAくんの不安を煽り、Aくんが雷が「鳴るよ」と断言してすぐに家に帰るように促したことから、母親は焦りはじめた。それは、早口という読み方で表現され、母親は絵本読みの進行を急ぐことになる。

#### ⑩ 予期せぬ効果

今にも雨が降り出し、雷が鳴り出しそうであった。この状況は、母親が絵本を読んでいる最中でも継続され、絵本読みの妨害となった。これは、Aくんが雨と雷を心配して家に帰るように母親を促す一因となり、母親が無理やり読まなければ最後まで絵本を読めないほどの影響を及ぼした。

### (2) 事例2 『ゆかいな かえる』を読む (2012年8月27日14時00分頃)

4歳の女の子・BちゃんとCちゃんが来館し、庭に出る。池で数匹のカエルを発見

し、カエルが泳ぎ、飛び跳ねる様子を見る。

約30分後、2人は読書室に入り、6つある本棚を順に眺める。Cちゃんが本棚から『ゆかいな かえる』を取り出して開き、その本扉をBちゃんに見せて、「これ、さっきのカエルみたい」というと、Bちゃんが「本当だ。これ、読もう」といって絵本を受け取る。BちゃんとCちゃんはソファに並んで座り、Bちゃんが元気よく声に出して読みはじめる。しばらくしてから、CちゃんもBちゃんに揃えるように声を出して読みはじめる。

「ひいらいた ひいらいた と ぐるぐる まわる。ぱしゃん！ てが はなれて しりもちついた。」と読んだ後、Cちゃんが「さっきのカエルだ」という。すると、Bちゃんが「こんなだよ」といい、座ったまま、カエルが泳ぐときのように足を動かす。Cちゃんも同じようにする。その後、2人は、床の上をカエルのように飛び跳ねる。飛び跳ねながら読書室を出て、中廊下と廊下を進み、絵本展示室を横切り、中廊下を渡って読書室へ戻る。ソファに置いていた絵本の続きを、ますます元気よく読む。

事例2の絵本『ゆかいな かえる』（ジュリエット・ケベシユ文・絵、石井桃子訳）は、アメリカ合衆国で1961（昭和36）年に出版され、日本では1964（昭和39）年に福音館書店から「世界傑作絵本シリーズ・アメリカの絵本」として出版された。事例2で実際に読まれたのは、2007（平成19）年3月1日第90刷のものであった。『ゆかいな かえる』は、4匹のカエルが、卵から孵り、オタマジャクシから成長して、冬眠するまでの1年間を描いた物語である。

次に、要素別に記述する。

#### ① 言葉

- a. 言語的側面…第3場面で「ほら」、第4、6場面で「あ」という感動詞が使われる。また、第3場面で「……」、第4場面の左ページで「?」、第6、7、10場面で「!」という符号が付される。さらに、第10場面で、「ひいらいた ひいらいた」という日本のわらべうたの1節が使用される。言葉遣いは簡潔で、歯切れよく、リズムカルであり、文体は叙事的である。文末は「だ・である」調であるが、最後の第15場面のみ「です・ます」調である。文章は横書きで表記される。文字は平仮名と英数字で表記され、明朝体で、同じ大きさで印刷される。文字の色は白色であるが、第1、6、13場面においてのみ黒色である。
- b. 非言語的側面…Bちゃんは、元気よく、大きな高い声と、しっかりとした口調で、『ゆかいな かえる』を読んだ。カエルのように足を動かし、飛び跳ねた後は、より一層元気よく読んだ。

c. 前後関係…BちゃんもCちゃんも『ゆかいな かえる』を読んだことがなかった。

② 絵<sup>13</sup>

16×24センチメートルの横長の絵本で、全32ページである。

カエル、サギなどの動物や植物は黒色の単純で伸びやかな線で描かれるが、その輪郭線は部分的に描かれるのみである。動物や植物は、輪郭線に頼らず、色を表現の主軸に据えている。陰影はほとんどない。画面は青色と緑色のみで彩られ、とくに青色が多用される。とりわけカエルは、泳ぐ、飛び跳ねるなどの動きを中心に、生き生きと描かれる。第4場面では、横長の見開きを生かして、カエルが長い後ろ足をダイナミックに動かして伸び伸びと泳ぐ様子と、移動距離、進行方向が表現される。また、第10場面は、左ページで水の中でカエルが前足を繋いで輪になって旋回して泳ぎ、右ページで前足が離れて尻餅をつく様子が、気泡や水しぶき、水の流れや水の深さなどの描写と相まって躍動感が伝わるように描かれている。第1～7、10、13～15場面の動態に対して、カエルがサギから隠れる第8、9場面とカメから隠れる第11、12場面では静止する時間が生み出されている。

背表紙には、ゴシック体の、白色の文字で「ゆかいな かえる」とある。「ゆかいな かえる」の上下には、黒色の文字で「ケベシユ」、「福音館書店」とある。背表紙、とくに「ゆかいな かえる」という文字は、庭で見たカエルの生態が絵本の中で描かれているとCちゃんに推測させ、Cちゃんが本棚に背表紙を見せて並ぶ多数の絵本の中から『ゆかいな かえる』を選ぶきっかけとなる。

本扉には、画面の3分の2を使って、4匹のカエルの全身が描かれる。4匹とも笑うように目を見開いて口を大きく開き、ばんざいをするように両前足を上げ、さらにこのうち3匹は片方の後ろ足を高く上げている。本扉は、物語の主要登場人物、およびこれからはじまる物語を想像させ、BちゃんとCちゃんが『ゆかいな かえる』を読むと決断する上で大きな役割を果たした。

③ 伴奏的付加物

Cちゃんが、Bちゃんと比べると小さな声を出して、Bちゃんに揃えるように読んだ。カエルのように足を動かし、飛び跳ねた後は、Bちゃんと一緒に元気よく読んだ。

④ 身体の動き

Bちゃんは、ソファに座って、自身の膝の上に絵本を置き、『ゆかいな かえる』を読みはじめた。読みながら、絵本のページをめくった。Cちゃんは、ソファに座って、隣に座るBちゃんの方へ身を乗り出すようにして絵本を読んだ。

BちゃんとCちゃんは、絵本読みの途中で、カエルのように足を動かし、飛び跳ねた。

## ⑤ 人物の特徴

Bちゃんは4歳の女の子であった。顔の形や体形は柔らかく、丸みを帯びていた。Bちゃんは、快活な性格で、Tシャツを着て、ショートパンツをはいていて、よく動いた。

## ⑥ 空間と時間

- a. 空間…『ゆかいな かえる』が読まれたのは、BちゃんとCちゃんが『ゆかいな かえる』を読む前から過ごしていた読書室の西側であった。読書室の西側は7.45平方メートルの空間である<sup>14</sup>。東と西に本棚が置かれ、北に窓があり、南は中廊下に接している。窓に沿って大人向けの1人掛けソファが2つ間隔をあけずに置かれ、床には何も敷かれていなかった。読書室と中廊下、中廊下と絵本展示室、絵本展示室と廊下、それぞれの境目の一部に壁はあるが、扉はなく、出入りや行き来がしやすい構造である。中廊下は廊下と繋がっている。読書室の西側の北の窓に沿って並ぶ2つのソファのうち東側のソファにBちゃん、西側のソファにCちゃんが位置していた。カエルのように飛び跳ねるときには、前にBちゃん、後ろにCちゃんが位置していた。
- b. 時間…夏が終わりに近づく頃の、月曜日の午後であった。『ゆかいな かえる』の絵本読みは、あらかじめ開催時間を決めて行われたわけではなく、庭で見たカエルの生態が描かれていると推測される絵本をCちゃんが見つけたのを契機にはじまった。BちゃんとCちゃんの絵本読みはBちゃんとCちゃんのペースで進められたため、また、途中でカエルのように足を動かし、飛び跳ねたため、催しなどで大人が子どもに読み聞かせるときよりも長い時間をかけて行われた。

## ⑦ 環境

与えられた環境であり、『ゆかいな かえる』を読むために演出されることはなかった。読書室のある建物の隣に、庭がある。庭には、カエルが生息している池がある。

## ⑧ 社会的背景

BちゃんとCちゃんは、友達の関係であった。

## ⑨ 生理的反応

庭でカエルを見たことから、Bちゃんは、カエルの生態が描かれていると推測される絵本を楽しく読みはじめた。途中からCちゃんがBちゃんに揃えるように一緒に読んだことによって、より一層楽しく読んだ。それは、大きな声と大きな動きで表現され、『ゆかいな かえる』の一層の熱演となって現れた。

## ⑩ 予期せぬ効果

なし。

ここまで、2つの事例を報告し、要素別に記述した。ほぼすべての要素が何らかのメッセージを発し、絵本読みを成立させていた。

最後に、「3. 考察」において、「2. 事例の記述」で記述したものを手掛かりに絵本読みという行為について考察する。

### 3. 考察

#### (1) 自然への興味の明確化

事例1のAさんと母親は、『あめふり』を読む前に、今にも雨が降り出し、雷が鳴り出しそうであると感じていた。Aさんと母親ははじめから『あめふり』を読むつもりで来館したわけではなかったが、「絵本の家」に『あめふり』という絵本があり、母親は本棚に背表紙を見せて並ぶ多数の絵本の中から「あめふり」という文字を見付けたとき、「今日の天気はちょうどよさそう」と直感した。Aさんは、母親から表紙を見せられたとき、降雨が絵本の中で描かれていると想像し、改めて雨を心配して、家に帰るように母親を促した。

事例2のBちゃんとCちゃんは、『ゆかいな かえる』を読む前に、カエルが泳ぎ、飛び跳ねるのを見ていた。BちゃんとCちゃんははじめから『ゆかいな かえる』を読むつもりで来館したわけではなかったが、「絵本の家」に『ゆかいな かえる』という絵本があり、Cちゃんは本棚に背表紙を見せて並ぶ多数の絵本の中から「ゆかいな かえる」という文字を見付け、さらに本扉を開いたとき、「さっきのカエルみたい」ととらえた。Bちゃんは、Cちゃんから本扉を見せてもらったとき、カエルの生態が絵本の中で描かれていると想像し、改めてカエルを意識して、読みたいと思った。

Aさんと母親が今にも雨が降り出し雷が鳴り出しそうであると感じたのは、「絵本の家」にくるまでの道において、また「絵本の家」の建物の中においてであった。一方で、BちゃんとCちゃんがカエルが泳ぎ、飛び跳ねるのを見たのは、「絵本の家」の庭においてであった。2009（平成21）年2月、「国立天文台と三鷹市の相互協力に関する協定」<sup>15</sup>が締結され、「絵本の家」を運営する三鷹市と天文台は天文台の良好な自然環境の保存活用や、宇宙、自然などに関する事業を連携して進めることになる。その一環として、三鷹市に天文台旧1号官舎の建物が譲与され、敷地が無償貸与され、「絵本の家」が開館した。「絵本の家」は、天文台の正門をくぐってから、その森の中を200メートル程歩いたところにある。途中に開けた場所もあるため、空模様を

うかがうことができる。「絵本の家」の建物は伝統的な日本家屋である。廊下には網戸とガラス戸が取り付けられていて、建物の中にも網戸やガラス戸越しに空をAくんと母親のように見ることができる。また、「絵本の家」の建物の隣には庭があり、庭には池がある。その池は、2010（平成22）年1月から3月にかけて手掘りで作られたものである<sup>16</sup>。そこで、卵から孵って成長したカエルが生活している様子をBちゃんとCちゃんのように見ることができる。さらに、「絵本の家」は、図書館とは異なる特色を出すため、宇宙や自然を描いた絵本を重点的に収集し、「ほし」、「もり」、「どうぶつ」などという「絵本の家」独自の分類で並べている。「絵本の家」では、天文台の豊かな森、家などの資源を生かした体験、および宇宙、自然などを描いた絵本との出会いが用意されているのである。

このような「絵本の家」に支えられて、Aくんと母親は今にも雨が降り出し雷が鳴り出しそうであると感じた後、降雨を描いているであろう絵本を見付け、雨や雷に対して注意を向けることになった。とりわけAくんは、「家に帰ろうよ」といい続ける程、雨や雷に対して特別の注意を向けるに至った。一方で、BちゃんとCちゃんはカエルが泳ぎ、飛び跳ねるのを見た後、カエルの生態を描いているであろう絵本を見付け、カエルに心惹かれることになった。Aくんと母親は今にも雨が降り出し雷が鳴り出しそうであると感じたにとどまらず、BちゃんとCちゃんはカエルが泳ぎ、飛び跳ねるのを見たにとどまらず、降雨、あるいはカエルの生態を描いているであろう絵本を見出し、手に取ることによって、雨や雷、あるいはカエルへの興味、すなわち自然への興味を明確にしたと思われる。

## (2) 自然への接近

Aくんは、母親に『あめふり』を声に出して読んでもらった。『あめふり』には、擬音語、擬態語を含むオノマトペが比較的多用されている。物語は「ずっとずっと、あめが じとじと ふっていた。」という文章ではじまる。「じとじと」という擬態語があることで、雨が続き、湿っぽいことが伝わってくる。「ばけつの みずを ふちまけたような あめが ふってきた。」という文章で「ばけつの みずを ふちまけたような」という比喻表現を使用して「激しい雨」<sup>17</sup>が降ってきたことを説明した後、次の場面で「かみなりも ゴロゴロ なりだし、いなびかりまで ピカリ ピカリ。」という文章が登場する。この文章には「ゴロゴロ」という擬音語と「ピカリ ピカリ」という擬態語が使われている。雷が不気味な音を立てて鳴る一方で、一瞬強く光った後に暗くなり、また強く光るといった現象が起きていることが伝わる。「じとじと」、「ゴロゴロ」、「ピカリ ピカリ」はいずれも、同じ言葉を繰り返して成り立って

いる。このうち「ピカリ ピカリ」は『あめふり』の作者のさとうわきこならではの擬態語だと思われる。さとうは言葉を繰り返すことについて、「宮沢賢治の言葉の使い方が好きで……繰り返しの言葉がとでも多いんですよね。普段使っていないような感じの音を使って、その表現にぴったりの言葉を作るから、すごいんですよね。」<sup>18</sup>と述べている。さとうは、幼い頃、父親から賢治の物語を聞き、また、絵の仕事をはじめた頃、宮沢賢治研究家の堀尾青史に同行して賢治の生家を訪ね、賢治直筆の手紙を書き写す仕事をしたことがある。賢治の語感の影響を受け、単に「ピカリ」とするのではなく重複させ、自身の表現したいことにより一層適したオノマトペをつくり出して用いたと考えられる。「オノマトペは、基本的にその音の響きから得られる意味を表すので、感覚的なことばであるが、一般語彙よりも生き生きとした臨場感に溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にする」<sup>19</sup>ことから、Aくんと母親はこのようなオノマトペによって、『あめふり』の世界に身を置いているように思えたと同時に、現実にも雨が降り雷が鳴るかのように感じたのではないだろうか。Aくんの母親はオノマトペを大きな声と明瞭な発音で声に出すことによって、Aくんはそれらを耳で聞き、さらに自身の背中に添えられた母親の左手から伝わる振動を感じることによって、その感覚をより一層強めたと考えられる。

絵本研究者の笹本純によると、「いずれ〔擬音語と擬態語〕も、状況を類似再現的に示すという点で絵と同じ働きをする」<sup>20</sup>（〔〕内引用者）。『あめふり』は、絵によっても、降雨と雷鳴をなぞって表している。現実には雨が降っているわけでも、雷が鳴っているわけでもなかったが、現実の空のように絵本の中で描かれた空は灰色で、現実の雲のように絵本の中で描かれた雲は黒紫色で、現実の家の外のように絵本の中で描かれた外は薄灰色である。絵本の中で黒色の細い直線を描くことによって表された降雨、および交互に折れ曲がった黄色の線を描くことによって表現された雷鳴も、現実にも出現するように、Aくんと母親には感じられたのではないか。『あめふり』は、Aくんと母親が絵本を読む前、また絵本を読んでいるときの現実にも即していた。現実の雨と雷の気配と相まって、状況を類似的に再現する擬音語や擬態語、絵によって提示された雨や雷は、Aくんと母親に迫ってきたに違いない。

Bちゃんはひとりで『ゆかいな かえる』を声に出して読みはじめ、やがてCちゃんもBちゃんに揃えるように『ゆかいな かえる』を声に出して読みはじめた。『ゆかいな かえる』においては、何よりも絵によって、カエルの生き生きとした動きが巧みに表現されている。とりわけカエルの長い後ろ足の動きは澁刺としている。『ゆかいな かえる』の奥付にある「作者紹介」に、「生きものたちの動くフォームが、何よりの絵の教師だ」という作者のジュリエット・ケペシュの言葉が掲載されており、ケペシュがカエルの特徴や動きをよく観察して、忠実に描き出そうとしていたこ

とがわかる。カエルは、人間の動きを取り入れて描かれているようにも見えるが、単なる擬人化とは一線を画していて、動的な姿態表現の的確さで、あくまで本物らしい。BちゃんとCちゃんにとって、『ゆかいな かえる』で表現されたカエルは現実のカエルとそっくり同じように感じられたであろう。

ケペシュの躍動感溢れる絵は、石井桃子によって翻訳された文章によって引き立てられている。石井は、翻訳するとき、自宅の「かつら文庫」に集まった子どもに繰り返し語り、子どもが物語の世界をありありと心に思い浮かべられるように訳文を練り上げたという<sup>21</sup>。『ゆかいな かえる』の翻訳においても同様に、子どもに語りながら、子どもがカエルの動きをイメージできるように訳を整えていったと推測される。「そして ほら 4ひきの かえるが もぐったり およいだり あそんだり……」という文章に見られる「ほら」、および「あ あのかえるが 1とうだ。」や「あ みつかった！」という文章に見られる「あ」という感動詞は、相手の注意を引くときや行為の最中に何かに気付いたときに出す声で、カエルの態度や動きと繋がっている。また、前述の文章の文末に見られる3点リーダー、「さきに あのに つくのは だあれ？」という文章の文末に見られる疑問符、「あ みつかった！」や「たのしく あそんでいる さいちゅうに、あぶない！ さぎたちだ！」や「ばしゃん！」という文章の文末に見られる感嘆符などの符号は、そこに挙げたものにとどまらないこと、問いかけ、感情の高まりや警告、音の強調を表し、「無機質な文字の羅列だけでは伝えきれない感情」<sup>22</sup>を豊かに表現している。さらに、「ひいらいた ひいらいたと ぐるぐる まわる。」について、石井の翻訳を研究する竹内美紀は、「日本語訳の『ひいらいた ひいらいた』を目にしたとたん、『何の花が開いた』が頭に浮かび、読み手の心情として、つい節をつけて歌ってしまう。」<sup>23</sup>と述べ、日本のわらべうたの一節が使われていると指摘する。わらべうたは、「遊びの中で自然発生的にでき上がってきた歌」<sup>24</sup>であり、「ひいらいた ひいらいた」と調子よく歌うように唱えることでカエルの遊びを盛り上げている。感動詞やわらべうたによって絵本の文章に情緒が足され、カエルの躍動感が高められることによって、BちゃんとCちゃんにとって絵本の中の4匹のカエルはますます実体を伴うように感じられたと思われる。『ゆかいな かえる』は、BちゃんとCちゃんが絵本を読む前に見た現実適合していた。現実のカエルの泳ぎと跳躍と相まって、生き生きとしていて動きがよくわかる絵と文章によって表現されたカエルは、BちゃんとCちゃんとの距離を縮めたといえるのではないだろうか。

Aくんと母親は「絵本の家」にくるまでの道や「絵本の家」の建物の中で今にも雨が降り出し雷が鳴り出しそうであると感じたことに、一方でBちゃんとCちゃんは「絵本の家」の庭でカエルが泳ぎ、飛び跳ねるのを見たことにそれぞれ寄り添う絵本

を、声に出したり聞いたり、見たりした。そうすることによって、Aくんと母親、BちゃんとCちゃんは、雨や雷、あるいはカエルへ、すなわち自然へ接近していったといえよう。

### (3) 人と自然との一体化

Aくんが最も反応したのは、「かみなりも ゴロゴロ なりだし、いなびかりまでピカリ ピカリ。」という場面であった。この場面が母親によって読まれたとき、Aくんは座っているソファの位置から、網戸やガラス戸越しに外が薄暗いことを見て、今にも雨が降り出し雷が鳴り出しそうであると感じていた。また、ソファの背後にある窓から外の暗さを感じていた。フランスの地理学者であるジャック・プザー＝マサビュオーは、「住居という人工の空間は、日本の場合には、人間を自然の猛威から守るという点では弱体だ」<sup>25</sup>と指摘する。伝統的な日本家屋を保存活用した「絵本の家」の建物は、雨、雷などから人身を守る場所というよりも、雨、雷などの威力を人に認識させる場所といえるであろう。また、建築家の宮川英二は、「日本の建築空間は、内部の空間と外部の空間とが必ずしも、はっきりと峻別されていない。」<sup>26</sup>といい、「自然をしめ出す代わりに、自然を内部にひき入れ、あるいは、内部を屋外へと延長して、可能な限り自然と一体になって生活しようとした。」<sup>27</sup>と述べる。「絵本の家」でも、建物の中にも、人は雨や雷と接触することができ、それどころかそれらとひとつに融合することすらできてしまうということになる。Aくんは、それまでは「雷が鳴るかも」というように可能性があることを示しただけであった。しかし、母親の「かみなりも ゴロゴロ なりだし、いなびかりまで ピカリ ピカリ。」に対して、Aくんが「鳴るよ」と断言した瞬間、Aくんと母親は現実の雷、およびそれを含む天気と一体化したのではなかったか。

BちゃんとCちゃんが最も触発されたのは、「ひいらいた ひいらいた と ぐるぐる まわる。ぱしゃん！ てが はなれて しりもちついた。」という場面であった。この場面をBちゃんとCちゃんが読んだ後、2人はカエルのように足を動かし、飛び跳ねた。すなわち、泳ぐカエルのように膝を軽く曲げ、踵を尻に近付けて前に蹴るように足を動かし、飛び跳ねるカエルのように膝を曲げてしゃがみ、両手を前に下ろして、床を蹴るように足を伸ばして斜め前に飛び跳ねた。石井が翻訳した別の絵本の担当編集者であった斎藤惇夫によると、石井は常に自己同一化して物語を楽しむ子どもの読みを意識していた<sup>28</sup>。BちゃんとCちゃんは現実で見たカエルや『ゆかいなかえる』のカエルに自分たちを投影させて、なりきって、遊んだといえそうだ。教育学者の矢野智司は、子どもはしばしば遊びの最中に、自己と世界との境界が溶解する体験をするというが<sup>29</sup>、BちゃんとCちゃんが夢中になってカエルのように足を動か

し、飛び跳ねて遊んだとき、BちゃんとCちゃんと、カエルとの間の境界線は消えていたと考えられる。BちゃんとCちゃんは、「ひいらいた ひいらいた と ぐるぐる まわる。ぱしゃん！ てが はなれて しりもちついた。」に対して、「さっきのカエルだ」、「こんだよ」といって、カエルのように足を動かし、飛び跳ねた瞬間、現実のカエルに同化したといえるのではないか。

Aくんと母親、あるいはBちゃんとCちゃんは、自身の体感や体験をもとにして、絵本を読んで、雨や雷、あるいはカエルという自然と一体化した。通常人は人、自然は自然というように切り離されてそれぞれで存在しているように見えるが、Aくん、母親、Bちゃん、Cちゃんの体が拠点となって、人と自然との間に密接な関係が打ち立てられた。絵本読みという行為が持つ意味の一側面は、絵本を通して人が自然と一体化し、自然と密接な関係を持つということであろう。ここで補足しておきたいのは、Aくん、あるいはBちゃんとCちゃんが子どもであるということである。児童学者の本田和子は、子どもについて、「原初的で自然の相をのびやかに生きる存在」であり、「分類も選別も排除も知らず、あらゆるものを共存させ、すべてを分有し、始原の混沌に安息することが出来」<sup>30</sup>という。このような子どもであるAくん、Bちゃん、Cちゃんだからこそ、自然との境界の消失や、自然との一体化が容易になったに違いない。

絵本は子どもが生まれてはじめて出会う芸術とみなされることが多いが、人類学者で思想家でもある中沢新一は、「芸術は人類の知的活動のもっとも古い層、人類の心にいまも確実に残されている野性の野に触れている」<sup>31</sup>と述べている。これを援用するならば、絵本というメディアは人と自然の断絶を乗り越えさせ、人と自然に根底で通ずるところを持たせるものであり、絵本には人と自然とを結び付ける志向性が宿っているのではないだろうか。絵本は、人と自然との通底路<sup>32</sup>となるメディアであり、絵本が内包する力の一端は人と自然とを結び付けるということであるといえよう。

## おわりに

以上、本稿では、絵本読みの各例を種類の異なった10の要素が複合することによって成り立っているものとして記述し、記述したものを手掛かりに絵本読みという行為について考察した。絵本読みは、絵本を通して人が自然と一体化し、自然と密接な関係を持つという意味を持っている。そして、絵本は、人と自然との通底路となるメディアであり、人と自然とを結び付けるという力を内包していると考えられる。

今後も引き続き、絵本を読むという行為を記述し、絵本が内包する力を探っていく

たい。これは、現在に焦点を当てた試みであるが、絵本はいうまでもなく現在に至るまでも子どもや大人に読まれてきた。絵本が社会的に果たしてきた機能を歴史的に明らかにすることもまた、今後の課題としたい。

(本稿の「2. 事例の記述」の「(1) 事例1 『あめふり』を読む」の事例は、修士論文「絵本が生きる〈場〉、絵本を生かす〈場〉——『三鷹市星と森と絵本の家』における観察研究——」(白百合女子大学、2011)において取り上げたものである。今回、新たに要素別に記述し、それに伴って考察を改めた。)

## 注

- 1 脇明子編著『子どもの育ちを支える絵本』岩波書店、2011。
- 2 瀧川光治『日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究』風間書房、2006。
- 3 高原佳江「絵本を読むという行為の記述の試み——『おおきなかぶ』と『サルビルサ』を例として——」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第21号、白百合女子大学児童文化研究センター、2018、pp.21-40。
- 4 佐藤郁哉『フィールドワーク 増訂版——書を持って街へ出よう』ワードマップ、新曜社、2006。佐藤によると、フィールドワークとは、「調べようとする出来事が起きているその『現場』(＝フィールド)に身をおいて調査をおこなう時の作業(＝ワーク)一般を指す」(pp.38-39)。
- 5 本田和子「保育研究における詩的経験」津守真・本田和子・松井とし・浜口順子『人間現象としての保育研究 増補版』人間現象としての保育研究1、光生館、1999、pp.61-108。「人が人を観る」とは、「物体としての対象」を写し出すことではない。「観る」ことによって、客体と接近し、同じ価値において相対するように筆者は心掛けている。
- 6 フィールドワークの実施にあたっては、事前に「絵本の家」から承諾を得ている。
- 7 『三鷹市星と森と絵本の家』(パンフレット)。
- 8 西江雅之「口承伝承の記述」千野栄一編『言語の芸術』講座言語第4巻、大修館書店、1980、pp.245-275。西江によると、「演じられている口承伝承作品はすべて、如何なる例も、基本的には十種類の互いにその境界領域を明確にしない諸要素が、それぞれの作品例に応じた割合で溶け合うことにより成り立っているものとする」(p.253)。同じく西江の『ことばを追って』(大修館書店、1989)、および『ことばだけでは伝わらない——コミュニケーションの文化人類学』(幻戯

- 書房、2017) も参照する。
- 9 藤本朝巳『絵本はいかに描かれるか——表現の秘密——』日本エディタースクール出版部、1999。同『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部、2007。同「第1章 絵本の絵を読み解く——絵本を演出する絵の諸機能とその効果」藤本朝巳・生田美秋編著『絵を読み解く 絵本入門』ミネルヴァ書房、2018、pp.3-10。
  - 10 「人気絵本と美術館を訪ねて ばばあちゃんと小さな絵本美術館」『MOE』第29巻第3号、白泉社、2007、p.98。
  - 11 例えば、歌川広重作「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」(1857) が挙げられる。
  - 12 『星と森と絵本の家 (仮称) 建設工事実施設計図』三鷹市都市整備部公共施設課、2010、ページ付なし。
  - 13 発行所の福音館書店に確認したが、絵本原画の素材は不明である。ケペシュは黒の線画を担当し、色については指定したのみで自身では付けなかったと推測される。
  - 14 『星と森と絵本の家 (仮称) 建設工事実施設計図』三鷹市都市整備部公共施設課、2010、ページ付なし。
  - 15 『三鷹市星と森と絵本の家』(パンフレット)。
  - 16 『はっけんノート 1 - 4』三鷹市星と森と絵本の家、2010、ページ付なし。『はっけんノート 5 - 9』三鷹市星と森と絵本の家、2014、ページ付なし。
  - 17 気象庁のリーフレット『雨と風 (雨と風の階級表)』(2017) によると、「バケツをひっくり返したように降る。」は、1時間雨量が30~50ミリメートルの「激しい雨」である。
  - 18 「絵本作家訪問記 さとうわきこさん」『母の友』第515号、福音館書店、1996、p.72。
  - 19 田守育啓『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』もっと知りたい!日本語、岩波書店、2002、p.v。
  - 20 笹本純「絵本の方法——絵本表現の仕組み」中川素子・今井良朗・笹本純『絵本の視覚表現——そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部、2001、pp.89-90。
  - 21 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店 (岩波新書)、1965。
  - 22 小学館辞典編集部編『句読点、記号・符号活用辞典。』小学館、2007、p.1。
  - 23 竹内美紀『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのか——「声を訳す」文体の秘密——』ミネルヴァ書房、2014、p.60。

- 24 繁下和雄「5 子どもと文化 1. 歌・音楽」岡本夏木・高橋恵子・藤永保編『生活と文化』講座幼児の生活と教育2、岩波書店、1994、p.135。
- 25 プズー＝マサビュオー、ジャック『家屋と日本文化』加藤隆訳、平凡社、1996、p.267。
- 26 宮川英二『風土と建築』彰国社、1979、p.156。
- 27 同、p.161。
- 28 斎藤惇夫『現在、子どもたちが求めているもの——子どもの成長と物語——』キッズメイト、2001、p.146。
- 29 矢野智司『動物絵本をめぐる冒険 動物－人間学のレッスン』勁草書房、2002、p.105。
- 30 本田和子『異文化としての子ども』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1992、p.135。
- 31 中沢新一『芸術人類学』みすず書房、2006、p.25。
- 32 「通底路」は、中沢新一『ミクロコスモス I』（四季社、2007）などで同様の意味で使用されている語である。